

大阪府感染症発生動向調査週報 (速報)

2018 (平成 30) 年 第 6 週 (2 月 5 日~2 月 11 日)

今週のコメント

～インフルエンザ～ 手洗い、咳エチケットが重要

定点把握感染症

「インフルエンザ ピーク越える」

第 6 週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は前週比 0.5%減の 1,611 例であった。小児科定点疾患、眼科定点疾患の定点あたり報告数の第 1 位は感染性胃腸炎で以下、A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎、RS ウイルス感染症、突発性発しん、流行性角結膜炎の順で、上位 5 疾患の定点あたり報告数はそれぞれ 4.8、1.9、0.5、0.3、0.2 である。

感染性胃腸炎は前週比 1%減の 941 例で、南河内 8.6、中河内 7.1、泉州 6.5、大阪市北部 6.3 の順である。

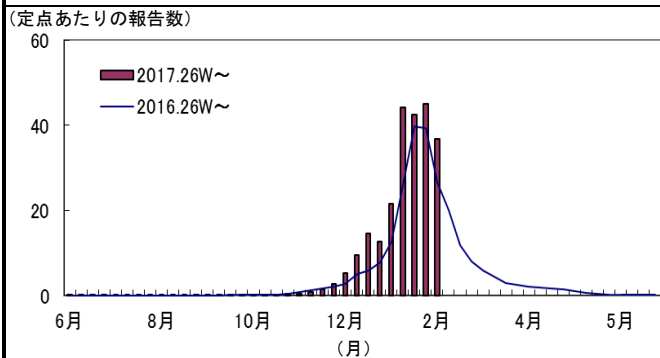
A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎は 1%増の 372 例で、大阪市南部 3.5、南河内 3.3、泉州・豊能 2.5 であった。

RS ウイルス感染症は 20%減の 99 例で、南河内 1.4、大阪市北部 1.1 である。

流行性角結膜炎は 42%減の 11 例であった。

インフルエンザは 18%減の 11,180 例で、定点あたり報告数は 36.8 である。南河内 57.8、大阪市西部 54.1、大阪市北部 41.3 となり、2 ブロックで警報レベル開始基準値の 30.0 を下回った。1 月の大阪府内のウイルス検出状況は、B 型 53%、AH3 30%、AH1pdm09 17%であった。

インフルエンザ



A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

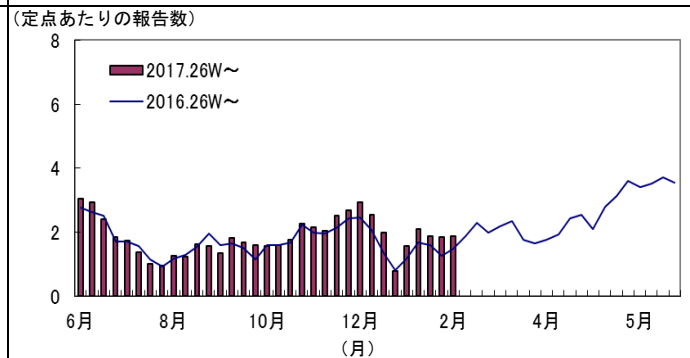


表 1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向 (2018 (平成 30)年 第 6 週 2 月 5 日~2 月 11 日)

第 6 週 の順位	第 5 週 の順位	感染症	2018 年 第 6 週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2017 年 第 6 週の 定点あたり 報告数	2018 年 第 6 週の 年齢別 患者発生数 最大割合値
1	1	感染性胃腸炎	4.8	1%減	4.1	1 歳_13%
2	2	A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.9	1%増	1.5	5 歳_14%
3	3	RS ウイルス感染症	0.5	20%減	0.3	1 歳未満_52%
4	6	突発性発しん	0.3	19%増	0.3	1 歳_54%
5	4	流行性角結膜炎	0.2	42%減	0.1	20 歳以上_64%
参考		インフルエンザ (インフルエ ンザ定点報告疾患)	36.8	18%減	26.6	20 歳以上_21%

第6週のコメント

～劇症型溶血性レンサ球菌感染症～ 国内では、毎年400-500例報告されており、致死率の高い感染症である

全数把握感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、主にA群溶血性レンサ球菌(*Streptococcus pyogenes*)による感染症である。国内では、毎年400-500例報告されており、約30%が死亡している。極めて致死率の高い感染症である。病状の進行が非常に急激かつ劇的で、発病後数十時間以内には軟部組織壊死、急性腎不全、成人型呼吸窮迫症候群、播種性血管内凝固症候群、多臓器不全を引き起こし、ショック状態から死に至ることがある。治療は、ペニシリン等の抗菌薬の投与と壊死に陥った軟部組織の切除が必要である。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)

[感染症の話\(国立感染症研究所\)](#)

(累積報告数)

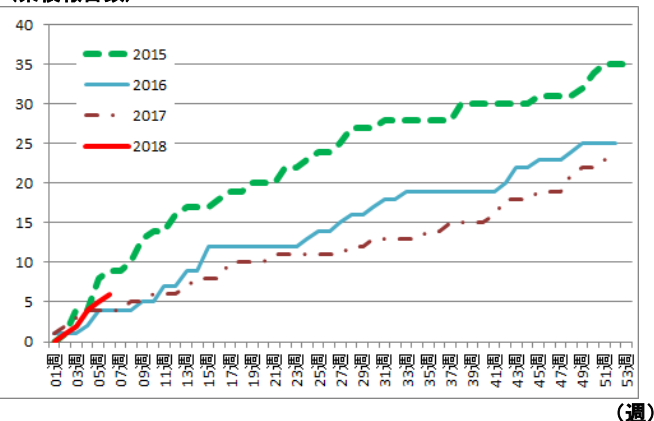


表2. 大阪府全数報告数 (2018(平成30)年 第6週 2月5日-2月11日)

*) 注意 : この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

3類感染症	報告はありません
4類感染症	報告はありません
5類感染症 (麻しん、風しんは除く)	劇症型溶血性レンサ球菌感染症 1名 (大阪市 1名、府内累積報告数 6名) 侵襲性肺炎球菌感染症 2名 (大阪市 2名、府内累積報告数 42名) 梅毒 6名 (大阪市 6名、府内累積報告数 93名) 百日咳 2名 (豊能ブロック 1名、三島ブロック 1名、府内累積報告数 18名)
結核 (2017年12月分)	結核 新登録患者数 : 172名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 71名) (府内累積報告数 1,910名、内 肺・喀痰塗抹陽性 790名)
麻しん、風しん	報告はありません

(2018年2月13日 集計分)